

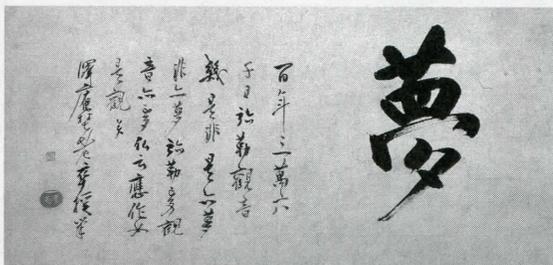
## 東海寺と沢庵

### 江戸の名僧・沢庵

三代将軍徳川家光が創建した万松山東海寺ばんしょうざん（臨濟宗大徳寺派 現、北品川3丁目）の開山に迎えられた沢庵宗彭たくあんそうほう（1573～1645）は、江戸時代の初めに活躍した禅僧である。但馬国たじまのくに（兵庫県）出石いずしに生まれ、京都・近江・堺と貧困の中で修行を積み、慶長14年（1609）、京都大徳寺の153世住職となった。その後、江戸幕府が発令した「大徳寺妙心寺法度」を批判したことから、幕府側の金地院崇伝こんちいんすうでんらの怒りをかい、寛永6年（1629）出羽国かみのやまはん（山形県）上山藩主土岐頼行にお預けとなった。この出来事は、「紫衣事件」と呼ばれている。

徳川秀忠の死後、大僧正天海などの尽力で、流罪を解かれ江戸に召還された。江戸に戻った沢庵は、将軍家光から絶大な信頼を寄せられることになる。寛永15年（1638）に家光が沢庵のために新寺を建立するという計画が発表され、翌年には、御殿山の南に東海寺が創建されて、沢庵が開山として迎えられた。

沢庵は、禅や仏教だけでなく、書・和歌・茶道・剣道・兵法・医学など多様な教養をもった文化人であった。茶道では、千宗巨せんそうたん・小堀遠州、剣術では、柳生宗矩むねのり・宗冬父子などの人々と親交を結んだ。



▲沢庵宗彭遺偈「夢」 東海寺所蔵

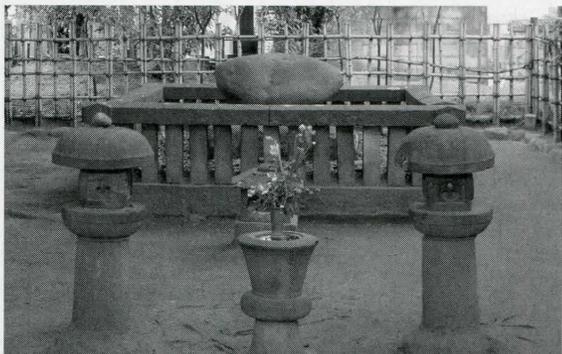


▲沢庵宗彭頂相 東海寺所蔵

吉川英治の小説『宮本武蔵』には、沢庵が武蔵の師として登場してくる。

沢庵は、弟子に「老僧遺戒之条々」という遺言を残し、正保2年（1645）に「夢」の一字を書いて亡くなった。

通称大山墓地と呼ばれる東海寺の墓地には、小堀遠州が築造したと伝えられる、大きな自然石を置いた沢庵の墓がある。

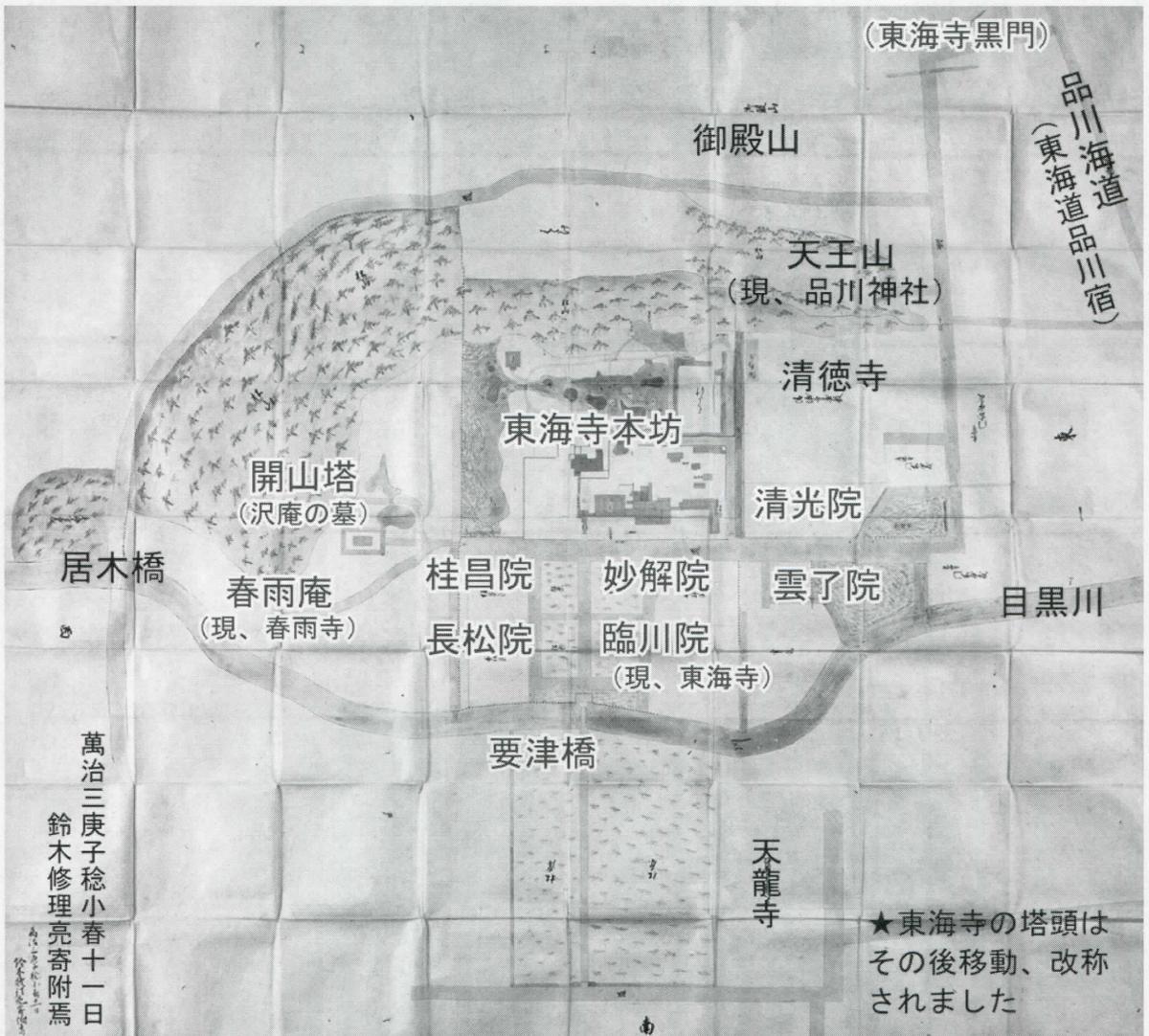


▲沢庵宗彭墓所

## 東海寺の境内

家光が建立した東海寺は、朱印領500石を有し、47,666坪（約157,000㎡）に及ぶ広大な寺域をもつ大禅林であった。また創建にあたっては、品川（目黒側）に橋（要津橋）を渡し、橋の向うに門前町が作られた。寺内には、最盛期に17の塔頭寺院が営まれた。なかには信濃松本城主堀田正盛の臨川院、若狭小浜藩主酒井忠勝の長松院、肥後熊本藩主細川光尚の妙解院、丹波園部藩主小出吉親の雲龍院（雲了院）、出羽藩主土岐頼行の春雨庵などの大名家創建の塔頭もあった。

東海寺は、元禄7年（1694）3月に品川宿から出火した火災で全焼した。すぐに5代将軍綱吉と桂昌院によって再建され、額門・山門・南門・仏殿・御成書院・客殿・法宝堂（ほうほうどう 経堂）・釣玄室（ちようげんしつ）などを整備した大伽藍となった。なお復興にあたり住職天倫宗忽が「東海禅寺十境」を選定した。潮音閣・法宝堂・浴鳳池・拳龍井・慈蔭塔（じいんとう 沢庵墓所）・要津橋（かつむらう 鐘楼）・釣玄室・万年石・千歳杉など境内の堂宇・池井・樹木・名石が選ばれた。現在の東海寺は、旧塔頭の玄性院（元、臨川院）が東海寺の名称を引き継いでいる。



▲東海寺想絵図 万治3年（1660）東海寺に残る一番古い境内絵図 東海寺所蔵